秋田県埋蔵文化財センター

平成二十八年度 企画展 第Ⅱ期

齶田（あきた）の原風景

～考古学で巡る秋田・男鹿・八郎潟周辺～

会期　平成二十八年九月三日～平成二十九年三月十二日

会場　秋田県埋蔵文化財センター　特別展示室

はじめに

「齶田」は、「渟代」とともに日本書紀斉明天皇四（六五八）年の阿倍比羅夫による北方遠征記事に「齶田渟代二郡蝦夷」として登場します。後世の写本にはそれぞれ「アイタ」（あるいは「アギタ」）、「ヌシロ」と訓が付けられたものもあり、現存する史料上での「秋田」及び「能代」地名の初出です。この秋田、能代を含めた現在の秋田県には、これまでに五〇〇〇以上の遺跡が確認されています。秋田県埋蔵文化財センターでは、平成27年度から3年間の計画で、これらのうちから各地域、各時代の遺跡を紹介する企画展を開催しています。

今年度は、「齶田（秋田）の原風景」と題して秋田県沿岸中南部の遺跡群についての展示を行います。第Ⅰ期は沿岸南部を対象としましたが、このたびの第Ⅱ期は、中央地区沿岸部（雄物川下流域、男鹿半島、八郎潟東岸）を対象に、各地の遺跡を近世からさかのぼって紹介します。各時代ごとに、城や居館・城柵官衙等の地域支配に関わる施設、あるいは中心的な大規模集落などと、地元住民の集落や墓地、周辺に分散する小規模遺跡などとをあわせて紹介し、それぞれの時代の特徴の一端を示したいと思います。

近世（江戸時代）

ここでは、まず江戸時代初期に佐竹氏が築いた久保田城跡（現在の秋田市千秋公園）と、その周辺の城下町の発掘調査成果を紹介します。この久保田城築城と城下町整備は、現在の秋田市の都市としての基本的な枠組みを形作ったものと言えるでしょう。続いて、久保田城下町とは対照的とも見える江戸時代の農村や墓地の発掘調査例を紹介します。江戸時代の武士や農民の暮らしを垣間見ることができるでしょう。

久保田城と近世城下町

関ヶ原の戦い後の慶長七（一六〇二）年、常陸国（現在の茨城県）から佐竹義宣が秋田氏（安東氏）に代わり秋田へ移されます。当初、義宣は秋田氏の居城であった湊城（現在の土崎神明社周辺）に入城しますが、新たに神明山に窪田城（久保田城）を築き、慶長九（一六〇四）年に移ります。さらに、築城に引き続いて、周囲の城下町整備を進めます。これまでに久保田城の本丸の一部や外堀などと、城下町の武家屋敷跡が発掘調査されています。

現在の久保田城跡と城下町

これまでに①久保田城本丸跡、②本丸の表門跡、③二の丸跡の一部、④二ノ丸の黒門跡、⑤中土橋、⑥穴門の堀、⑦大手門の堀、⑧東根小屋町遺跡、⑨古川堀反町遺跡、⑩藩校明徳館跡などが調査されています。

●久保田城跡（秋田市千秋公園ほか）

久保田城は神明山と呼ばれる標高約40mの独立した丘とその周囲に築かれました。本丸、二ノ丸、北ノ丸などの複数の廓が連なる平山城で、天守閣は造られませんでした。これまでに秋田市教育委員会によって本丸の一部や黒門跡、表門跡、二の丸跡などが、秋田県埋蔵文化財センターによって中土橋や穴門の堀などの外堀の一部が発掘調査されています。平成15年の外堀と中土橋の調査では、儀式に使われた鳥形や斎串、かわらけなどのほかに、多数の陶磁器や刀なども見つかっています。

▲調査時の久保田城外堀の様子

堀から刀が見つかった様子▶

●東根小屋町遺跡（秋田市中通）

久保田城城下町は、主に城の南側に広がる内町（武家町）とその西側の外町（町人町）及び寺町とで構成されます。内町と外町とは、南北真っ直ぐに改修された旭川と掘った土を盛った土手で区画されていました。

東根小屋町遺跡は、内町にある上級武士の屋敷跡です。屋敷は参勤交代路に面していました。平成14・15年の調査で、掘立柱建物跡、門跡、井戸跡、便所跡など多数の遺構が重複して見つかりました。絵図と照合すると、17世紀後半には岡氏、18世紀中葉以降には武藤氏の武家屋敷であったことが確認できます。

◀桶を積み重ねた井戸跡

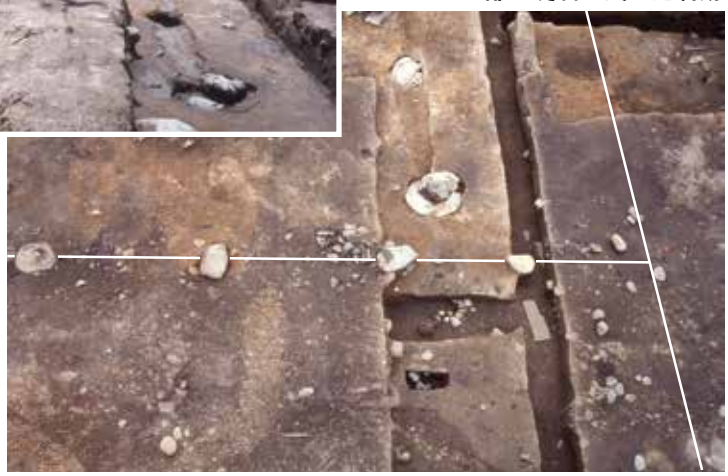
▼発掘調査の様子

●古川堀反町遺跡（秋田市千秋明徳町）

遺跡は古川（改修前の旭川）沿いにある上級武士の屋敷跡です。平成17年の調査で、掘立柱建物跡や掘立柱と礎石立ての柱とを併用した建物跡、井戸跡などが重複して見つかりました。絵図や出土した木簡などから、17世紀後半に根本・横田・後藤・川井氏の屋敷地となり、その後の変遷を経て、文政四年（一八二一）年には根本・真崎・小野岡氏、文政一二（一八二九）年には根本氏と家老職の小野岡氏の屋敷であったことがわかりました。

◀発掘調査の様子

▼一部に礎石が残る建物跡



近世の農村と墓地

江戸時代には城下町が都市として発達する一方で、農村なども存在し、また、これら村人の墓地と推測されるものが見つかっています。農村などの発掘調査例は少ないのですが、短期間で断絶した例や、長期にわたり継続して営まれた例などがあり、その変遷は多様だったようです。

●毘沙門遺跡（潟上市昭和豊川竜下）

遺跡は豊川左岸の標高3～7mの低地に立地します。平成11年の調査で、掘立柱建物跡1棟のほか、便所跡や柱穴などが見つかりました。掘立柱建物跡は中世末から江戸時代初め頃のものと推定されます。周囲には多数の柱穴が重複し、さらに調査区の東隣りには現在の集落が広がっています。これらのことから、中世末には周辺で水田が開発され、遺跡はおそらく現代まで継続した農村だったのでしょう。

毘沙門遺跡の調査区

●鹿来館跡（潟上市飯田川和田妹川）

遺跡は井川丘陵西側の台地上にあります。標高は9～41mです。平成11年の調査で、古代の集落、中世の城館と重複して、江戸時代後半の掘立柱建物跡が1棟だけ見つかりました。建物は長さが4m余りの小さなもので、丘陵上での農作業の際の出小屋のようなものだったかもしれません。

江戸時代の掘立柱建物跡

●黒沼下堤下館跡（秋田市河辺北野田高屋）

遺跡は和田丘陵南端部に位置します。平成22年の調査で、古代の集落と近世の墓地が見つかりました。墓地の場所は標高35～40mほどの西向きの斜面で、村を見下ろすような所に作ったのかもしれません。墓地からは木棺墓が6基確認され、中には人骨や副葬した銭貨が残っていたものもありました。

人骨が残る木棺墓

コラム❶

真澄は毘沙門遺跡の建物を見た？

江戸時代の紀行家菅江真澄は、文化八（一八一一）年に龍毛村沖（毘沙門遺跡から南へ500mほどにある「道の駅しょうわ」の近く）の澤井家を訪れた記録を残しています。真澄の描いた村の絵には、川（豊川？）沿いに10軒ほど、奥の山の麓側に数軒の建物があります。もしかしたら、この奥の方が毘沙門遺跡だったかもしれません。また、澤井家の絵を見ると、内部は床が板敷きや畳敷きです。当時の多くの農家は、床は地面に藁や筵を敷いた簡素なものだったのに比べると、立派な建物だったと言えるでしょう。毘沙門遺跡の建物跡も柱穴の配置が規則的で整っていて、おそらく澤井家のような板敷きや畳敷きの建物だったのでしょう。

菅江真澄『軒の山吹』　左：澤井重助の栖家、右：沖の松
（秋田県立博物館蔵写本）

中世（戦国時代～室町時代～鎌倉時代）

ここでは、有力な戦国大名の安東氏が整備した脇本城跡、そして名前は伝わっていませんが、地域の有力者の城館や居館を紹介します。次に農村と考えられる在地の村落、さらに中世に大きく発達した都市についても紹介します。

中世の城と居館

戦国時代には北方交易を通じて有力な戦国大名に成長した安東氏やその家臣が脇本城を始め、城館を各地に築城、整備します。また、在地領主の城館や地侍層の居館なども各地で出現しています。規模や構造は多様で、短期間で放棄されたものもあり、有力者には時期や地域により様々な盛衰がありました。

●脇本城跡（男鹿市脇本）

脇本城跡は、男鹿半島南東部、寒風山南方の丘陵地に築かれた巨大な山城です。日本海を望む標高100m前後の丘陵上にあり、その範囲は150万㎡にも及びます。脇本城築城に至る経緯ははっきりとはわかりませんが、檜山安東氏と湊安東氏を統一した安東愛季が、天正五（一五七七）年に大規模に改修し、居城としました。周囲には城下町も形成され、その町並みが現在も残っています。16世紀末前後には廃城となったようです。

南上空から見た脇本城跡（男鹿市教育委員会提供）

写真右側の脇本本郷集落の町並みは城下町の町屋の短冊形地割りを残しています。脇本城跡に隣接する脇本遺跡は平成18年に調査しました。町人の住む町屋ではなく、侍屋敷だったようです。

●鹿来館跡（潟上市飯田川和田妹川）

近世の農村で紹介した鹿来館跡は、中世の城館としても利用されていました。城館の範囲は東西380m、南北450mのおよそ20万㎡に及ぶと考えられます。調査では、空堀や土塁、馬屋の可能性がある掘立柱建物跡などが見つかっています。

南上空から見た鹿来館跡

●待入Ⅲ遺跡（秋田市金足片田）

遺跡は豊川丘陵南端、北に延びる馬の背状の台地に立地しています。台地には凹凸がかなりあって、標高は14mから33m前後まで変化しています。平成3年の調査で、室町時代の掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、火葬墓が集中する墓地などが見つかっています。掘立柱建物跡は斜面に造成された平場にありました。総柱構造で、東西が10～15m、南北が12mほどの大形のものです。遺跡には空堀や土塁などの大規模な区画施設は認められず、ほかに同時代の建物跡も見当たりません。これらのことから、遺跡は、在地の農民の中での有力者であった地侍層の居館であったと推定されています。居館には建て替えられた痕跡などは認められず、それほど長期間使われることなく放棄されたようです。

調査区と掘立柱建物跡

中世の村と都市

中世には先に紹介した城館などのほかに、農村や漁村といった在地の村落も多数存在しています。しかし、その調査例は少なく、実態は必ずしも明瞭ではありません。一方、この時期には港（湊）町など、人が集中する都市の存在が明らかになってきます。また、調査では銭貨や輸入陶磁器などが出土する例も増加します。貨幣経済が発達し、陶磁器などの商品が盛んに流通した状況を示唆しています。

●平右衛門田尻遺跡（秋田市飯島）

遺跡は新城川右岸の天王砂丘上に立地しています。標高は9～15m前後です。平成20年の調査で、古代の集落跡のほかに、室町時代の井戸跡などが見つかっています。住居や水田などは確認できませんでしたが、当時の農村の一部だったようです。輸入陶磁器などは見つかりませんでしたが、このことは遺跡が農村であったことを反映しているのでしょう。

西上空から見た平右衛門田尻遺跡

●古野遺跡（秋田市上北手古野）

遺跡は猿田川右岸、和田丘陵西端に立地します。標高は20m程度です。平成6年の調査で、縄文時代や平安時代の竪穴住居跡のほかに、鎌倉時代の建物跡と竪穴状遺構がそれぞれ一つずつ見つかっています。

建物跡は丘陵の緩斜面を削って造成した平場に作られた掘立柱形式のものです。規模は周囲4m四方ほどの小形のものでした。これに隣接する周囲2m足らずの小形の竪穴状遺構とが、当時の1家族の住居と倉庫といった組み合わせになっていたようです。

古野遺跡の調査区の様子

●北遺跡（五城目町野田）

遺跡は馬場目川右岸の低地に立地しています。標高は5mほどです。平成11年の調査で、鎌倉時代の井戸跡15基や便所跡、溝跡などが見つかっています。この時代の確実な住居は確認できませんでしたが、おそらく掘立柱建物構造の住居がいくつか集まる村だったと推測されます。井戸跡からは、イネやモモ、スモモなどの当時栽培されていた植物のほかに、ウグイやクロダイの骨も見つかっていて、農耕のほかに付近の川や海で漁撈も行っていたのかもしれません。また、中国産の輸入陶磁器が少し見つかっており、経済的に余裕のある人がいたのでしょう。

▲北東から見た北遺跡

見つかった井戸跡▶

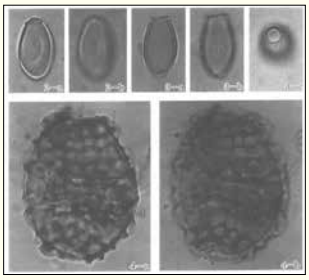
遺跡で見つかるトイレ

発掘調査では、竪穴住居跡や墓穴など大小様々な穴（の跡）が見つかります。穴の性格の判断が難しい場合は、単に穴（の跡）の意味で、「土坑」と呼ばれることが一般的です。

北遺跡の発掘調査では土坑が34基見つかりましたが、発掘後の分析で、そのうちの3基がトイレの跡、便所跡であることがわかりました。便所跡は長さ1m、幅0.8m程度の穴で、形だけからはトイレとは断定できません。ところが、穴に溜まった土を分析すると、人の排泄物はすでに分解していましたが、排泄物に含まれていた寄生虫卵が大量に見つかったのです。このことから、これらの土坑は最終的にトイレと判断されました。

土の分析ではトイレであったことがわかるだけではありません。例えば、古代秋田城跡の水洗トイレでは、ブタの生肉を食べることで感染する寄生虫の卵が確認されたことから、ブタを常食する渤海国からの来訪者が使ったことが推測されているのです。

北遺跡のトイレ跡



見つかった寄生虫卵

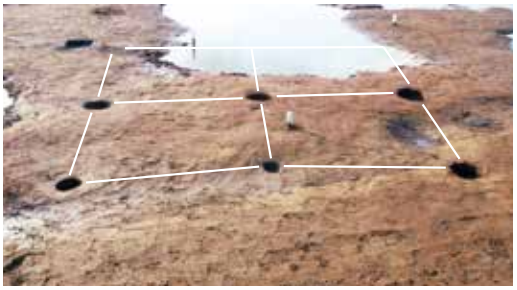
●洲崎遺跡（井川町浜井川）

遺跡は八郎潟に流入する井川左岸の低地に立地します。標高は1～2mほどで、干拓前の湖岸からは約200mの位置にあります。平成9・10年にかけて3万㎡近い範囲が発掘調査されました。その結果、東西南北に規則的に延びる中世の堀跡・溝跡や道路跡、100棟以上の掘立柱建物跡や300を越える井戸跡などが見つかりました。また、中国産などの輸入陶磁器、国産陶器のほか、漆器や曲物などの木製品、銭貨などもたくさん出土しました。

東上空から見た洲崎遺跡

遺跡は鎌倉時代前期から戦国時代末期頃まで続きますが、遅くとも室町時代の始め頃までには、2町（約220m）四方が堀で囲まれます。堀の内側には南北道路や東西道路が走り、それらの道路に沿うように多数の建物や井戸が作られます。このような特徴から、遺跡は単なる村ではなく、都市であることが明らかです。周辺には後に街道となる道路や寺院などがあること、あるいは堀は八郎潟に通じる運河であったと想定されることなどから、市や寺院の宿坊が営まれ、さらには湊町でもあったと推定されています。

▲隣り合って見つかった3基の井戸跡



見つかった掘立柱建物跡▶

古代（平安時代～奈良時代～飛鳥時代）

古代は律令政府の支配が秋田の地にも及び、やがてその影響が衰退する時代です。ここでは、最初に平安時代後半に現れる在地の有力者の居館を紹介します。そして律令政府の城柵官衙であった秋田城と官衙関連遺跡、さらに各地の村や様々な墓も紹介します。

古代末の豪族居館

平安時代後半には律令政府の支配は弱まります。代わって在地の有力者が出現し、出羽国では清原氏が台頭します。近年、横手市の大鳥井山遺跡など、清原氏が関わったと推定される居館が確認されていて、古代秋田郡内でも虚空蔵大台滝遺跡が調査されています。

●虚空蔵大台滝遺跡（秋田市河辺豊成）

遺跡は岩見川右岸の御所野台地上に立地します。最も高い所で標高は46m前後です。平成16年の調査で、平安時代末期に作られた切岸を伴う空堀や土塁、柵列跡、建物跡などが見つかりました。まるで戦国時代の城館跡と見間違いそうですが、清原氏の一族だった吉彦秀武に関わる居館だった可能性も想定されています。

西上空から見た虚空蔵大台滝遺跡

秋田城跡と官衙関連遺跡

奈良時代前半に、今の山形県庄内地方から秋田市高清水に律令政府の地方官庁である出羽柵が移設され、奈良時代の半ばには秋田城となります。その後、平安時代中頃まで、秋田城が雄勝城や郡衙などとともに、出羽国北部支配の拠点でした。

●秋田城跡（秋田市寺内ほか）

遺跡は標高30～50mの高清水丘陵上に立地します。天平五（七三三）年に出羽柵として築かれ、天平宝字四（七六〇）年頃には秋田城と改称されます。中心には重要な政務を行う政庁があり、遺跡周囲は外郭と呼ばれる一辺約550mの不整方形の区画施設が巡ります。外郭は、当初築地塀で東西南北に門が付きます。門や塀には瓦が葺かれていました。外郭の外側にも水洗トイレなど様々な施設が広がっています。

復元された外郭東門と築地塀（秋田市教育委員会提供）

これまでの100次を越える調査から、秋田城は城柵と呼ばれる古代律令政府の行政機関であり、かつ軍事施設でもあったこと、さらに、北方交易や渤海国などとの外交でも重要な役割を果たしたことがわかってきています。

秋田城は元慶二（八七八）年に城下12村の蝦夷（夷俘）によって焼き落とされます（元慶の乱）。その後再建されますが、10世紀半ばには、その役割を終えてしまうようです。

●中谷地遺跡（五城目町大川谷地中）

遺跡は馬場目川左岸、標高6m前後の低地に立地します。平成11年の調査で、平安時代の掘立柱建物跡などのほかに、墨書土器や斎串、形代などの律令政府で盛んに使われた祭祀具が大量に見つかりました。遺跡の西500mほどには秋田郡衙の有力な候補地である石崎遺跡があり、この郡衙に関係する祭祀場であったものと推定されています。

北東から見た中谷地遺跡

古代の集落

史料からは、古代には移民である柵戸、在地民と思われる蝦夷、俘囚、夷俘など、多様な集団が形成した集落の存在がうかがえます。夷俘が律令政府に反乱し、秋田城などを襲った元慶の乱（八七八年）の記録には、腋本村など反乱側12村と添河村など政府側３村の名前が登場します。

●小谷地遺跡（男鹿市脇本富永）

遺跡は八郎潟西岸、標高11ｍ前後の低地に立地します。平成21年の第５次調査では、過去の調査で古代の埋没家屋と推定されていた施設が水田の灌漑堰であったことがわかり、新たな灌漑堰跡に加えて、大量の農具、墨書土器や律令政府の役人が付けた銅製の帯飾り（丸鞆）なども見つかりました。付近には政府の役人が開発に関わった水田とこれを耕作する人々が住む集落が存在するのでしょう。また、元慶の乱の反乱12村のうちの腋本村であったとする考えもあります。

南東上空から見た小谷地遺跡

●山崎遺跡（秋田市下新城小友）

遺跡は上新城丘陵の南端に立地します。標高は26ｍ前後です。平成３年の調査で、平安時代中頃の掘立柱建物跡が１棟見つかりました。このほかに建物の柱穴がたくさん見つかっていることから、さらに多くの建物があったものと推定できます。丘の上に複数の建物が立ち並ぶ村だったようです。

山崎遺跡の調査区

●片野Ⅰ遺跡（秋田市上新城中）

遺跡は半島状に突出する上新城丘陵西端部に立地します。周辺地形はかなり変化に富んでいて、遺跡の標高は40～52ｍ前後です。平成４～６年の調査で、平安時代前半の竪穴住居跡が約200ｍ離れて各１軒見つかりました。竪穴構造の農家が１か所に集まらずに分散する散村の一種と言えるでしょう。

見つかった竪穴住居跡

●大清水台Ⅱ遺跡（秋田市金足大清水）

遺跡は日本海沿岸沿いに発達する秋田北部砂丘のうちの内陸側の第一砂丘列上に立地します。標高は13ｍ前後です。平成７年の調査で、竪穴住居跡１軒や須恵器坏、土師器甕、刀子、砥石などが見つかりました。竪穴は5.5ｍ四方前後で、東壁北寄りにカマドがあったと推定されます。以前に発見されていた７世紀後半の須恵器坏は、この住居から出土したと判断できることから、住居の年代も同じ頃と考えられます。

県内では７世紀後半の住居跡の発見例は極めて少なく、沿岸部では本住居跡が唯一の例です。７世紀後半は、阿倍比羅夫の北方遠征からその直後にかけての時期にあたります。出土した刀子や砥石は律令政府の役人の持ち物である可能性が高いことから、続日本紀に見える渡嶋津軽津司の関係者の住居であったとする考えもあります。

見つかった竪穴住居跡

7世紀の秋田

前のページで触れたように、大清水台Ⅱ遺跡で見つかった竪穴住居跡は、渡嶋津軽津司に関わる役人の住居であったとも想定されています。渡嶋津軽津司は、具体的な場所は不明ですが、7世紀中頃の阿倍比羅夫の北征後、出羽柵（秋田城）移設前に、政府の出先機関として設置された役所と考えられます。

一方、日本書紀の記述からは、阿倍比羅夫の北征時には、現在の秋田、能代周辺に狩猟を主な生業とする「蝦夷」と呼ばれた在地集団が存在していたことがうかがえます。書紀の記述には、蝦夷は服属させ教化することが必要な野蛮な人達だとするための誇張が含まれているかもしれません。しかし、遣唐使に伴って蝦夷の男女2人が唐の皇帝に謁見した際の唐の記録（通典）などからも、蝦夷の人達が弓矢の名手で狩猟を盛んに行っていた蓋然性はやはり高いように思われます。

実は、現在のところ、秋田や能代周辺だけでなく、秋田県内で7世紀の蝦夷に関わると考えられる遺跡は、まったくと言えるほど明らかでありません。竪穴住居ではなく、簡易な構造のテントのようなものに住み、狩りをしながら移動生活を送っていたのかもしれません。今後の発掘調査の成果が期待されます。

古代の墓

古代の墓は、本来墳丘と周溝を伴った末期古墳と見られるものから、遺体を直接埋葬した木棺墓、あるいは遺体を荼毘に付して（火葬して）焼けた骨を蔵骨器に納めたもの、焼骨をそのまま穴に埋めたものなど様々です。これらの違いは、例えば身分や出自の違い、他界観や信仰の違いなど、当時の人々の多様性を反映しているのでしょう。

●大杉沢遺跡（秋田市四ツ小屋小阿地）

遺跡は標高40m前後の御所野台地北端に立地します。昭和61年の調査で、直径11～15m前後の環状の溝跡が3条見つかりました。これらは、遺跡の南西約2kmのJR四ツ小屋駅近くにあった小阿地古墳と同様の末期古墳だったようです。墳丘や墓本体は削られてしまい、墳丘の裾を巡っていた溝（周溝）だけが残ったと考えられています。

見つかった環状の溝跡

●湯ノ沢F遺跡（秋田市御所野湯本）

遺跡は御所野台地の南端に立地します。標高は33m前後です。昭和58・60年の調査で、平安時代の木棺墓が40基も集中する墓地が見つかりました。木棺墓は同じ向きにかなり整然と並ぶことなどから、いずれも近い時期に営まれた可能性が高いと考えられています。

見つかった木棺墓
（秋田市教育委員会提供）

●潟向Ⅰ遺跡（秋田市金足小泉）

遺跡は標高20m前後の秋田北部砂丘上にあります。昭和58年の調査で1基、それ以前のものも含めると合計7基の蔵骨器を埋めた墓が見つかっています。別の場所で火葬し、骨を土師器の甕などに納めて埋めています。

見つかった蔵骨器

●松館遺跡（秋田市金足岩瀬）

遺跡は標高22mの豊川丘陵西端部に立地します。平成2年の調査で、必ずしも時期ははっきりしませんが、4基の墓が見つかっています。いずれも他の場所で火葬し、焼骨を炭などとともに直接穴に納めています。

見つかった火葬墓

古墳時代～弥生時代

古墳時代は前方後円墳の造営が大きな特徴ですが、北東北から北海道には前方後円墳は存在しません。さらに、県内ではこの時代から弥生時代後期の遺跡の発見例が極めて限られています。弥生時代前期～中期には台地や砂丘上に集落があり、周囲の低地で稲作を行ったと考えられる遺跡が見つかっています。

古墳文化の到来

古墳時代には県内に古墳は伝わりません。しかし、沿岸部や横手盆地には古墳文化の系統である、四角い平面形の竪穴住居や土器がごく僅か出現します。この時代には、続縄文文化の狩猟採集中心の生活様式をもつ人もいたと推測されますが、古墳文化を受容した人達との関係はよくわかっていません。

●小谷地遺跡（男鹿市脇本富永）

先に古代の水田開発に関わる遺跡として紹介しましたが、昭和56年の調査では、当時「埋没家屋」とされた灌漑堰の下から古墳時代の土師器が見つかっています。発見場所が当時も水路だったとすると、古墳時代においても、すでに稲作を行っていた地域から移住してきた人達が水田を開発していたのかもしれません。

見つかった土師器

水田農耕の受容と断絶

弥生時代は水田農耕の開始が大きな特徴です。北東北でも前期から中期にかけては、いくつかの遺跡では水田農耕が開始されていて、当時の集落も見つかっています。ところが遅くとも後期には水田は放棄され、集落そのものも途絶えてしまうようです。寒冷化などの環境の悪化が原因とも言われています。

●片野Ⅰ遺跡（秋田市上新城中）

先に古代の農家を紹介した片野Ⅰ遺跡では、弥生時代前期～後期の遺跡も存在します。土器や石器のほかに紡錘車も出土しましたが、住居や水田などは見つかりませんでした。

南上空から見た
片野Ⅰ遺跡

●地蔵田遺跡（秋田市御所野地蔵田）

遺跡は標高40m前後の御所野台地上に立地します。昭和60年の調査で、3軒もしくは4軒の大形住居群が大きく木柵に囲まれる弥生時代前期の大集落であったことがわかりました。周囲の低地には水田があり、稲作を行っていたと推測されています。

柵や住居が復元された地蔵田遺跡

●風無台Ⅱ遺跡（秋田市河辺松渕）

遺跡は岩見川左岸の標高42m前後の七曲台地北端に立地します。昭和58・59年の調査で、弥生後期の土坑と前期の住居跡などが見つかっています。後期の土坑は壺を副葬した墓穴だったかもしれません。前期の住居は直径8mほどの大形のもので、中央には石で囲った炉があります。地蔵田遺跡の住居とよく似た形をしています。

壺が出土した弥生後期の土坑

弥生前期の住居跡

●越雄遺跡（井川町黒坪）

遺跡は標高15m前後の大麦丘陵の西端に立地します。平成12年の調査で、弥生前期の住居跡が見つかりました。中央に炉がありますが、直径3m足らずの比較的簡易な住居だったようです。地蔵田遺跡のように、周辺の低地で水田を耕作していたかはっきりとはわかりません。

弥生前期の住居跡

縄文時代

今からおよそ1万5千年前から2千4百年前が縄文時代です。縄文土器が作られ、主に狩猟採集を行い、定住生活がしだいに一般化する時代と考えられています。しかし、地域や時期によって、遺跡の数や特徴などは極めて変化が著しく、「縄文（時代）」とまとめることについての異論さえあります。秋田でも地域的な独自性が顕著な時期や広く共通性が認められる時期などもあり、その特徴は多様です。ここでは、晩期、後期、中期、前期後半、早期～前期前半に分けて遺跡を紹介します。

縄文晩期の墓地

縄文晩期の遺跡の特徴の一つは、多くの墓が密集する墓地が出現することです。弥生時代の地蔵田遺跡でも墓地が形成されていて、その先駆けと考えることができるかもしれません。しかし、弥生時代の地蔵田遺跡では、墓地に隣接して存在した大形住居に大勢住んでいた人達が葬られたと考えられるのに対し、晩期の墓地では、墓地に葬られた人達が住んだと考えられるだけの規模や数の住居が近くに見当たりません。普段は墓地から離れた場所に分かれて生活し、特定の時季に墓地に集まって死者を埋葬したり、死者に対するマツリなどを行っていたようです。

●戸平川遺跡（秋田市添川）

遺跡は旭川左岸、羽黒山丘陵北西端の緩斜面に立地します。標高は25～30m前後です。平成7・8年の調査で、縄文晩期の墓地と沢を利用した捨て場が見つかりました。墓地では72基の土坑墓が見つかり、多くは道に沿うかのように並びます。墓地には掘立柱建物跡4棟も伴います。建物は桟敷のような高床だった可能性もあり、普通の住居とは考えられません。捨て場からは大量の土器や石器のほか、漆器がまとまって見つかっています。おそらく遺跡の外部に別れて暮らしていた人達が集まって墓を作り、持ち寄った大量のモノを捨てる、一種の宴会のようなマツリを行ったものと想像されます。

東から見た戸平川遺跡

土器が副葬された土坑墓

縄文後期の小規模遺跡

縄文後期は、県北では大湯環状列石などのストーンサークルが出現することが大きな特徴ですが、秋田中央部では未確認です。この時期の住居の確認例もごく僅かで、墓地の様子もあまりよくわかりません。住居が各地に分散し、大勢が集まる機会が少ない生活だったのかもしれません。

●戸島上野Ⅰ遺跡（秋田市河辺戸島）

遺跡は岩見川左岸、七曲台台地の北東側に立地します。標高は42m前後です。平成9年の調査で、縄文後期の竪穴住居跡が2軒隣接して見つかりました。竪穴住居はいずれも直径5m足らずで、中央にはともに炉があったようです。住居は同時にあったのではなく、それぞれ単独で存在していました。数少ない住居が点在するこの時期の特徴を示しているのでしょう。

南上空から見た戸島上野Ⅰ遺跡

縄文後期の竪穴住居跡

縄文中期の小集落と環状集落

縄文中期には、前後の時期に比べ住居跡の発見例が増加しています。一つの遺跡に複数の住居跡が集まり集落と呼べる例も多く、特に中期後半頃には多数の住居跡が集中する傾向が最も顕著になります。中には、河辺松木台Ⅲ遺跡のように中央の広場の周りに住居跡が巡り、最終的には中央広場の周囲に住居跡が環状に分布する「環状集落」と呼べる遺跡も出現しています。

●河辺松木台Ⅲ遺跡（秋田市河辺松渕）

遺跡は岩見川左岸、標高40m前後の七曲台地北端に立地します。平成9年の調査で、縄文中期後半の竪穴住居跡48軒、掘立柱建物跡20棟、土坑墓などが見つかりました。住居跡は、平成9年調査区では南側にも点在しますが、沢を挟んだ北側に45軒の住居跡が集中します。長径約25mの中央広場には土坑墓が5基前後あり、広場の周りを住居跡群が径50mほどの環状に巡ります。いわゆる環状集落です。同時に存在していた住居は最大でも10軒前後と推測されますが、中央広場が中心として存在し続けた結果、住居跡が最終的に環状に累積したものと考えられます。広場にはリーダーのような特別な人だけが葬られ、折に触れて様々な集落のマツリが行われていたのでしょう。中央広場は特別な墓地であるとともに言わば集落のイベント会場だったのではないでしょうか。

県内には中央広場の周りに住居が巡ると考えられる集落はいくつかありますが、実は、河辺松木台Ⅲ遺跡のように広場に墓があり、住居が環状に巡ることがはっきりわかる例はあまり見当たりません。現状では、河辺松木台Ⅲ遺跡は県内の環状集落の中では特異例と言えるかもしれません。

河辺松木台Ⅲ遺跡の環状集落

縄文中期後半の竪穴住居跡

中央広場の土坑墓

●泉野冷水遺跡（男鹿市北浦相川）

遺跡は男鹿半島北岸、標高35～40m前後の北浦南部段丘上に立地します。平成10年の調査で、縄文中期後半の竪穴住居跡が20軒近く見つかりました。住居跡は大きくは2地点に集中しますが、環状集落のように規則的にはまとまらないようです。

縄文中期後半の竪穴住居跡

●繋沢遺跡（秋田市河辺三内）

遺跡は岩見川右岸、標高約80mの和田丘陵東端に立地します。平成15年の調査で、縄文中期前半の竪穴住居跡が4軒見つかりました。住居は単独で短期間だけ使われたようで、複数の住居が1か所にまとまるようなことはありませんでした。

南西上空から見た繋沢遺跡

縄文中期前半の竪穴住居跡

縄文前期後半の大形住居

縄文前期後半は、竪穴住居跡の発見例が以前の時期よりも増加します。ドングリなどの植物を食料として大量に採集し、保存・利用するようになったことが関係しているようです。見つかった竪穴住居跡には平面形が長方形で、長さが10mを越えるような大形住居と呼べるものもあります。この時期を特徴付ける住居です。

●**蟹子沢遺跡（秋田市濁川）**

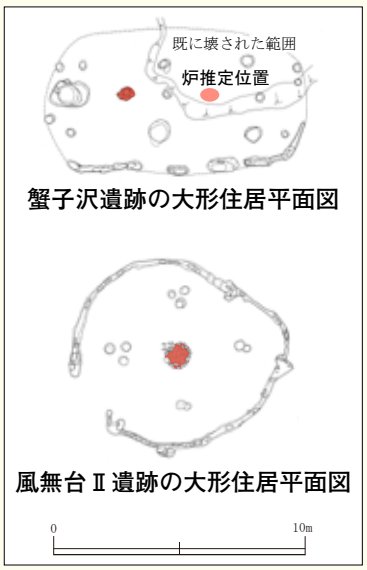
遺跡は標高37～46mの上新城丘陵南西端に立地します。平成6年の当センターの調査では、縄文前期後半の竪穴住居跡が2軒見つかりました。住居跡はいずれも長さが10mを越える大形のものでした。おそらく1軒の住居に1家族ではなく、複数の家族が住むようになったと考えられます。住居の中で多くの人が手分けをして何かの作業をするようなことがあったのかもしれません。

縄文前期後半の大形住居跡

コラム④

2種類の「大形住居」

蟹子沢遺跡では、縄文前期後半に特徴的な、長さが10mを越える長方形の大形住居が見つかりました。一方、先に紹介した風無台Ⅱ遺跡の弥生時代の大形住居は、直径8m余りの円形でした。いずれも一家族だけが住むには大きすぎ、もっと多くの家族が住んだのでしょう。ただし、両者には形以外に注目すべき違いがあります。住居の炉です。蟹子沢遺跡は、同時期の類例から炉は住居の軸線上にさらに1、2基あったと推定できます。風無台Ⅱ遺跡の大形住居では中央に石囲炉が1基あるだけです。前者では炉を中心に個別の生活空間がある、いわば長屋のような構造であったのに対し、後者では一家族が住む小形の住居をそのまま拡大した構造です。このような構造の違いは、おそらく、そこに住んだ複数の家族間の関係や意識の違いを反映しているのでしょう。



蟹子沢遺跡の大形住居平面図

風無台Ⅱ遺跡の大形住居平面図

縄文前期前半から早期の遺跡

縄文前期前半以前は、遺跡の確認例は多くありません。脇本海岸での早期遺物の採集例などから、古い時期の遺跡が海底に存在している可能性があります。しかし、遺跡も人口も後の時期より相当少なかったのでしょう。

●**小浜沢遺跡（男鹿市北浦西黒沢）**

遺跡は男鹿半島北端、標高30m前後の海成段丘上に立地します。昭和57年の調査で、縄文前期前半の竪穴住居跡が1軒見つかりました。住居は一辺が3m前後の小さなものです。この時期には1家族が小さな1軒の住居で独立して暮らすことが一般的だったのでしょう。

縄文前期前半の竪穴住居跡

●**上祭沢遺跡（秋田市河辺戸島）**

遺跡は岩見川左岸、標高60m前後の河岸段丘上に立地します。平成元年の調査で、縄文早期後半の土器破片が見つかっています。この時期の住居などは見つからず、土器の量は僅かです。狩りなどのために短期間だけ訪れたものと推測されます。

東から見た上祭沢遺跡

旧石器時代

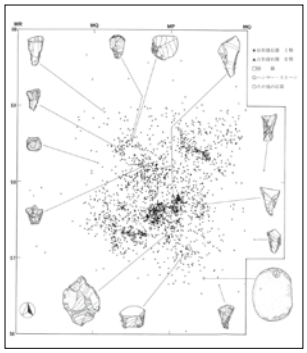
旧石器時代は、約3万5千年前から1万5千年前の時代です。まだ土器はなく、移動しながらナウマンゾウなどの大形獣や中形～小形獣を狩猟する生活だったと推測されています。しかし、県内では調査された遺跡は少なく、実際の様子はよくわかっていません。

旧石器時代の大遺跡と小遺跡

旧石器時代の遺跡には、石器が何千点もまとまって出土し、石器製作をさかんに行ったと推定される、大遺跡と言えるものがあります。一方、石器が1点しか見つからないような小遺跡もあります。どちらも旧石器人の行動を反映していることは確かでしょう。

●風無台Ⅱ遺跡（秋田市河辺松渕）

先に弥生時代の遺跡として紹介しましたが、弥生時代の地表面より少し下から約2万年前の旧石器時代の石器も大量に見つかっています。径12mほどの範囲に合わせて5千点近い石器や石器を作る時にできる小さなかけらがまとまっています。この場所で石器作りを集中して行ったのでしょう。



石器の分布図

●元木山根Ⅱ遺跡（潟上市昭和大久保）
●古野遺跡（秋田市上北手古野）
●繋沢遺跡（秋田市河辺三内）

元木山根Ⅱ遺跡は標高23～29m前後の出羽丘陵西端部に立地する平安時代の集落跡です。平成11年の調査で、皮なめしの道具と推定される旧石器時代のエンドスクレイパーが1点だけ見つかりました。

古野遺跡と繋沢遺跡はそれぞれ鎌倉時代と縄文時代の遺跡として紹介しました。二つの遺跡では、槍先として使われたと考えられている旧石器時代のナイフ形石器が1点ずつ見つかっています。

各遺跡で具体的にどのような活動が行われたかはよくわかりませんが、当時の人がそれぞれの場所までやってきたことを示しています。

南西から見た元木山根Ⅱ遺跡

北上空から見た古野遺跡

西上空から見た繋沢遺跡

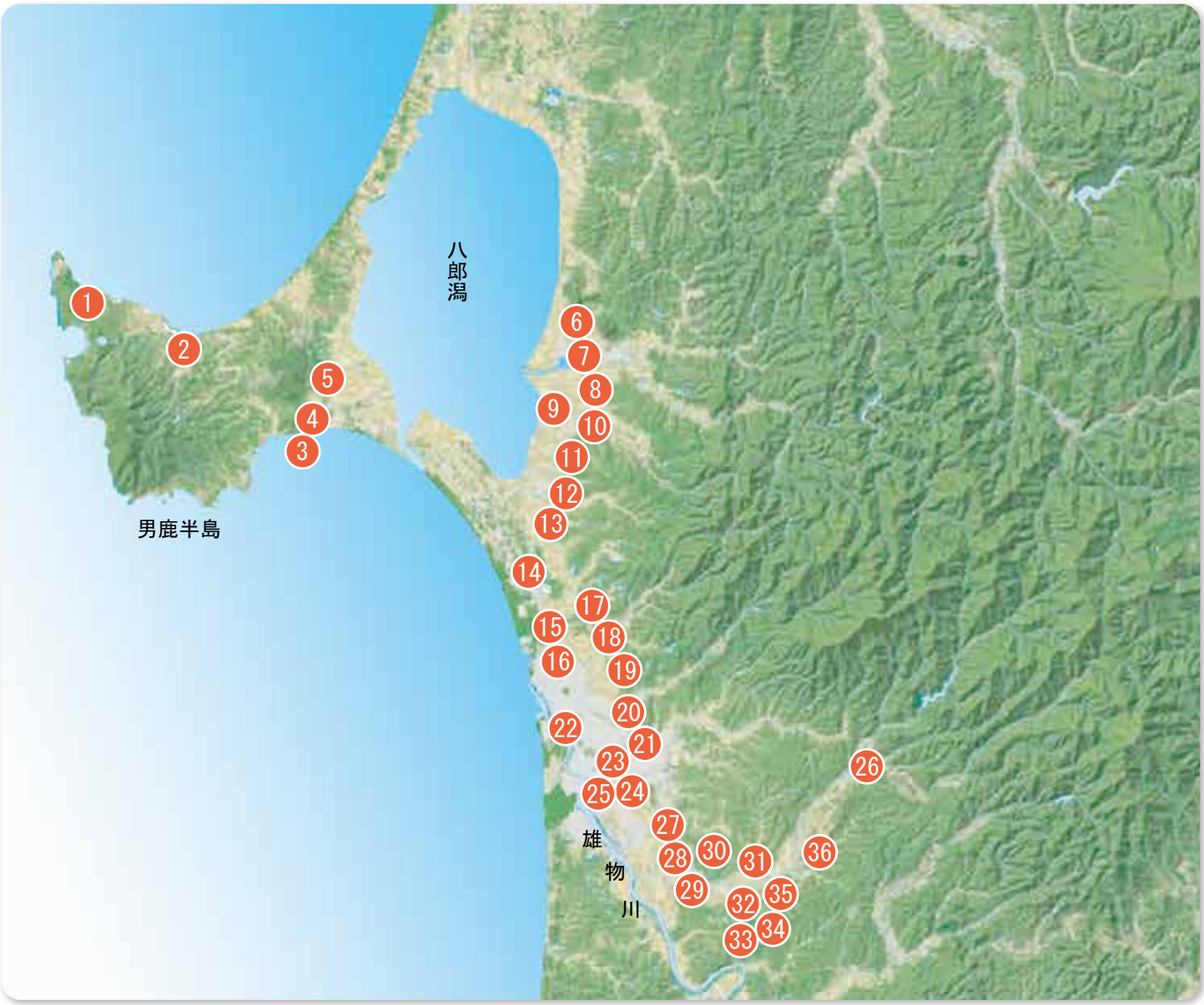
コラム5

旧石器時代と岩宿時代

日本列島に旧石器時代が存在したことが認められたきっかけは、戦後間もない群馬県岩宿遺跡の発見です。無人の時代のものとされていた赤土の中から明らかな石器が見つかったのです。当初、この時代は先土器時代、無土器時代などと呼ばれ、やがてヨーロッパの用語を採用して旧石器時代と呼ぶことが一般化します。ところが、研究の進展によって、ヨーロッパと日本列島では異なる特徴が明らかになってきています。前者では打製石器しかありませんが、後者では磨製石器も存在します。また、列島の旧石器時代の終わりがヨーロッパよりもはるかに遡ることもわかってきました。これらから、岩宿遺跡の名前をとって、岩宿時代と呼ぶ考えもあるのです。

おわりに

今回の展示では、秋田中央地区の遺跡について、主に秋田県埋蔵文化財センターの発掘調査資料を元に紹介してきました。今回紹介できなかった遺跡も多く、また、発掘調査成果を必ずしも体系的に提示できた訳ではありません。今後の発掘調査の進展を期するとともに、これまでの発掘調査資料の再検討に努め、それらの成果をあわせて、機会を得て改めて秋田の原風景を紹介したいと思います。



展示遺跡の位置

展示遺跡一覧

1. 小浜沢遺跡
2. 泉野冷水遺跡
3. 脇本海岸
4. 脇本城跡・脇本遺跡
5. 小谷地遺跡
6. 北遺跡
7. 中谷地遺跡
8. 越雄遺跡
9. 洲崎遺跡
10. 鹿来館跡
11. 毘沙門遺跡
12. 松館遺跡
13. 元木山根Ⅱ遺跡
14. 大清水台Ⅱ遺跡
15. 潟向Ⅰ遺跡
16. 平右衛門田尻遺跡
17. 待入Ⅲ遺跡
18. 山崎遺跡
19. 片野Ⅰ遺跡
20. 蟹子沢遺跡
21. 戸平川遺跡
22. 秋田城跡
23. 久保田城跡
24. 東根小屋町遺跡
25. 古川堀反町遺跡
26. 繋沢遺跡
27. 大杉沢遺跡
28. 地蔵田遺跡
29. 湯ノ沢Ｆ遺跡
30. 古野遺跡
31. 虚空蔵大台滝遺跡
32. 戸島上野Ⅰ遺跡
33. 上祭沢遺跡
34. 河辺松木台Ⅲ遺跡
35. 風無台Ⅱ遺跡
36. 黒沼下堤下館跡

展示並びに本パンフレット作成に際し、展示品や写真等の借用を始めとして、次の方並びに機関に多大な御配慮・御協力をいただきました。

磯村亨
秋田市教育委員会・秋田城跡歴史資料館
男鹿市教育委員会
五城目町教育委員会
秋田県立博物館

平成二十八年度企画展第Ⅱ期パンフレット

齶田（あきた）の原風景

～考古学で巡る秋田・男鹿・八郎潟周辺～

平成二十八年九月
秋田県埋蔵文化財センター
秋田県大仙市払田字牛嶋二十番地
電　話　〇一八七（六九）三三三一
ＦＡＸ　〇一八七（六九）三三三〇

表紙の写真は「秋田城跡のある高清水丘陵」（秋田市教育委員会提供）